

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16740

研究課題名(和文)アゼルバイジャン語における疑問接語の生起位置と生起条件に関する研究

研究課題名(英文)Research on the Position and Conditions for Appearance of the Azerbaijani Clitic

研究代表者

吉村 大樹(YOSHIMURA, Taiki)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：80522771

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文):本研究課題は、アゼルバイジャン語で諾否疑問文のマーカと説明されてきた疑問接語が口語で省略されやすいとされる現象について、生起する場合文中のどの位置に生起することができるか、またいつ省略されるかという問題に解答を提示することを目的とした。疑問接語の生起位置については同じくテュルク諸語南西語群に属するトルコ語と比較するとほぼ同じ分布を示していることが明らかになった。また生起条件については質問への解答や勧誘など、聞き手への働きかけを意味的に表示する必要があるときに、生起する傾向が強いことがわかった。このことから、アゼルバイジャン語の疑問接語が、質問以外の別の機能を有する可能性を明らかにした。

研究成果の概要(英文):This research project aims to investigate the range of occurrence of the Azerbaijani interrogative clitic, and answer the question when it does or does not occur. The range of occurrence of the clitic in question is almost the same as in Turkish, belonging to the same South-West Turkic language group. The study concludes that the interrogative clitic is realised when the speaker attempts to ask the addressee to do something (e.g. answer the question). Furthermore, the study suggests that, unlike Turkish, the Azerbaijani interrogative clitic itself does not function as the interrogation marker but as something different from interrogation.

研究分野：言語学、テュルク語学

キーワード：テュルク諸語 アゼルバイジャン語 統語論 形態論 疑問文 対照言語学

1. 研究開始当初の背景

テュルク諸語のうち最も文法研究が進んでいると思われるトルコ語では、疑問文の文法構造に関して国内外で近年盛んに研究が行われている (Aygen 2007, Yüzel 2012, 佐藤 2013 など)。すなわち、日本語の「か」や「の」に機能的によく似ている語尾 (以後「疑問接語」) が、特定の語句だけを疑問の焦点 (話し手が質問したい部分) にするために文末だけではなく文中にも現れる現象が注目を集めている。研究代表者自身も、これまでこの現象に関心を持ち、研究を進めていた。

- (OK) 名詞句 名詞句 動詞句 疑問接語 (文全体または動詞部分が疑問の焦点)
- (OK) 名詞句 名詞句 疑問接語 動詞句 (下線部の名詞句だけが疑問の焦点)
- (OK) 名詞句 疑問接語 名詞句 動詞句 (下線部の名詞句だけが疑問の焦点)

さて、トルコ語と同じく南西語群に属するアゼルバイジャン語の言語における疑問接語は、口語で省略される傾向があることや、基本的には述語末位置に生起する (Hüseynzadə 2007 など) と言われてきた。しかし、実際には文末だけでなく述語の直前の位置に生起して、特定の語句のみを話し手の疑問の焦点とする現象も指摘されている (Abdullayev et al. 2007)。この構文自体はトルコ語でも見られるが、出現可能な位置の範囲がトルコ語やウズベク語と比較してどうであるかはまだ詳細に検証されていなかった。その他にも、言語ごとに疑問接語が出現可能な位置の範囲になぜ差があるのか、口語アゼルバイジャン語では疑問接語が省略されるという上述の傾向と関連して、述語の直前の位置に疑問接語が現れる現象も口語で回避される傾向があるのか、聞き返しの疑問文 (たとえば「彼が昨日来たかって?」のような文) は口語・文語ともにどのような文で表現するのか、などの疑問についても検証する必要があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、疑問接語が出現可能な位置の予測、および疑問接語が出現する (または、しない) 条件を明らかにすることである。これらの点の解明には、申請者がこれまでトルコ語やウズベク語などのテュルク諸語の分析において提案してきた手法を適用し、その手法の検証・修正を行い、アゼルバイジャン語の諾否疑問文が有する諸特徴を解明すること、さらには類型論、理論言語学両面への貢献を究極の目標に定めた。

本研究の特色の1つは、単に母語話者が容認可能な用例のみを集めるだけでなく、容認不可能な構造を排除する文法論的枠組みの

構築を目指すことである。より具体的に言えば、以下のような問題点を設定し、その解明によりアゼルバイジャン語の諾否疑問文の特徴を明らかにすることである。

- (i) 疑問接語が動詞形式に隣接する場合、先に疑問接語を生起させ、その後人称語尾を付加した構造はアゼルバイジャン語において本当に不適格か。
- (ii) アゼルバイジャン語において、口語・文語ともに文中に疑問接語が生起できるか。できる場合、トルコ語と比較してどの程度自由に生起できるか。
- (iii) 文の前提として背景化される語に疑問接語が近接した場合、不適格と判断されるか。
- (iv) 従属節を含む構文 (複文) の内部に疑問接語が現れた場合、トルコ語と違ってアゼルバイジャン語では不適格な構文と判断されるか。
- (v) トルコ語ではいわゆる聞き返しの諾否疑問文には必ず疑問接語が出現するが、アゼルバイジャン語ではどのような聞き返しの諾否疑問文を用いるのか。
- (vi) 多くのテュルク諸語と同じく膠着語の特徴を示し、かつ SOV 型の基本語順をとる日本語の疑問を標示する「の」や「か」と対照すると、それぞれどのような類似点と相違点があるか。

テュルク諸語の疑問文の構造の解明は、日本語の疑問文との対照研究という観点からも国内外で注目されている。その中で本研究は、以下の点に留意した。

(i) アゼルバイジャン語と日本語だけを主眼に置くのではなく、トルコ語やウズベク語などのテュルク諸語との対照という視点も含める。アゼルバイジャン語はトルコ語と同じくテュルク語南西語群に属していることから、疑問接語の文法的ふるまいがほぼ同じものであると一見予想できそうだが、実際は他のテュルク語とは疑問文の構造が異なる可能性がある。

(ii) 従来の記述文法書の記述よりも精度が高く、かつアゼルバイジャン語母語話者の直観を適切に反映した記述を行う。つまり、単に文法的に容認可能な構文のみを記述するのではなく、どのような構文が容認されない構文であるのかについても調査する。

(iii) 研究課題に関連する諸言語の諾否疑問文について、以下のような疑問を解明すること。(1)トルコ語の疑問接語の出現可能な位置の広さ、またトルコ語の語順や語内部の構造、および意味構造との関係性、および他のテュルク語と比較した場合の位置づけ。(2)アゼルバイジャン語の疑問接語の出現範囲の広さと、できるだけ疑問接語を使わずに疑問文を形成する傾向がどの程度強いのか。(3)現代

日本語の「か」はアゼルバイジャン語の疑問接語と対照した場合の出現位置の範囲、および話し手の質問したい部分の範囲という点でどのような特徴があるか。

本研究は、テュルク語の多様性を明らかにする点で一般言語学・テュルク語学の進展への貢献を目指した。あわせて、いわゆる SOV 型語順、かつ膠着語である日本語との対照をふまえることで、通言語的な疑問文の研究にも貢献することを期した。

3. 研究の方法

本研究は平成 27 年度から平成 29 年度まで、年度ごとに、概略以下のように研究計画を行い、ほぼ予定通り実施することができた。

(1) 平成 27 年度(2015 年度)はアゼルバイジャン、および研究代表者が研究活動の拠点としたトルコにおいてテュルク諸語・およびアゼルバイジャン語の文語資料、およびアゼルバイジャン語学関連資料の収集を行った。特に現地調査ではアゼルバイジャン語の文学作品・専門書・新聞等の文献を収集し、文語による諾否疑問文の実例を採取した。同時に、文語においてどのような疑問文が使われているかを調査し、聞き取り調査の結果との比較・検討を行った。研究の拠点地としたトルコにおいては、国外研究協力者であるアンカラ大学のアイシェヌール・テキメン教授、チャナッカレ・オンセキズマルト大学のオズベッキ・アイトゥン准教授といった日本語・トルコ語の対照研究の専門家から、資料収集・対照研究に関するアドバイスを受けるなど、情報交換を行った。

また、聞き取り調査に関しては以下の点に着目し、調査票を作成した。

(i) 動詞形式と疑問接語が隣接した場合の疑問接語と人称語尾の相対的な位置

(ii) 述語後要素に疑問接語を隣接させてみた場合も含めて、文中の様々な位置に疑問接語を出現させた場合の容認性

(iii) 従属節の内部に疑問接語を出現させた場合の容認性

(iv) 聞き返しの疑問文に疑問接語を使用した場合の容認性、および実際の口語での実例

この調査については、同じく国外研究協力者の一人であるイブラヒモフ・ヤシャール氏のご協力をいただき、アゼルバイジャン言語大学の学生 16 名からの回答を得ることができたことを付記しておきたい。また、国内研究協力者として東京外国語大学大学院の奥真裕氏、日高晋介氏には主に日本国内で入手可能なテュルク諸語および日本語研究関連資料の入手をお願いした。

(2) 平成 28 年度(2016 年度)は、前年度に引き続き現地調査を 2 回行い、アゼルバイジャン語疑問文のデータ収集の追加・補足を行った。具体的には、アゼルバイジャン語における聞き返しの疑問文と疑問接語の生起との関係や、名詞修飾節を含む従属節における疑問接語の生起の可否などについての追加データを得た。また、典型的な質問ではない疑問文(話し手の納得や提案、反語などの意味を表す疑問文)と疑問接語の生起との関連性についても、バクーでの現地調査の際に言語情報提供者に聞き取りを行い、データを収集した。

また、前年度までに得たデータの分析を行い、その成果について後述 5. のとおり第 18 回トルコ言語学国際会議においてアゼルバイジャン語の疑問接語のふるまいを、トルコ語との対照という観点により分析した結果を発表した(〔口頭発表〕(4))。

(3) 平成 29 年度(2017 年度)は本研究課題のうち、疑問接語が生起する条件についての調査を主眼とし、現地調査にて言語情報提供者から追加のデータを取得することができた。当初の予想では、疑問文が典型的な質問でない場合には逆に疑問接語が出やすいという条件があるのではないかという仮説を立てていたが、次節にて述べるように実際は典型的な話し手から聞き手への質問であるかどうかということと疑問接語の生起それ自体には直接の因果関係が認められるというわけではないことが明らかになった。また、疑問接語の研究に関連して、アゼルバイジャン語における繫辞(コピュラ)の文法的ふるまいがトルコ語と異なるという点にも着目し、このことが言語記述上どのような意味を持つかについても考察することになった。

4. 研究成果

研究成果として、以下のことを明らかにした。また、研究期間内の研究成果を論文として公刊するという点については、当初の予定より若干遅れている。しかし、今後口頭発表した内容等の加筆・修正を行い、引き続き研究を推進していく予定である。以下、項目ごとに期間内に得られた成果について述べることにする。

(1) アゼルバイジャン語においては述語のタイプ(つまり、述語が名詞や形容詞なのか、あるいは動詞なのか)や単文・複文の差異にはほぼ関係なく諾否疑問文において疑問接語が脱落する傾向があるという点が明らかになった(〔口頭発表〕(4))。一方、フォーマルな文書(たとえば、査証申請の用紙など)などでは質問文に疑問接語が生起しやすい

ということを確認した。また、文中に生じた例文の適格性の判断が言語話者により異なるということが興味深い結果として挙げられる。特に、「～がある(いる)」という意味を表す、いわゆる存在文の述語 var に対して、位置格を伴う名詞に疑問接語が付加されると容認度が下がると判断する話者がいることがわかった(〔口頭発表〕(4))。

(2) 疑問接語の生起可能な位置については、トルコ語とほぼ類似した分布をしていることが明らかとなった。すなわち、一部の従属節内部での生起、存在文などでの文中の生起が許されないという点でトルコ語とわずかに異なる一方、名詞句の内部、述語後要素などには疑問接語が後接できないということを確認した(〔口頭発表〕(4))。

また、アゼルバイジャン語と同系統の言語であるトルコ語と日本語における疑問を表示する形式(トルコ語の疑問接語と日本語の「カ」)について、具体的な対照研究を行い(〔口頭発表〕(5))、さらに加筆・修正した論考を公刊した(〔雑誌論文〕(2))。同論文では主にトルコ語の疑問接語を議論の中心に据えたが、質問文の成立に疑問接語の生起それ自体が必須の要件ではないという点でアゼルバイジャン語とトルコ語との相違点を指摘し、この点においてアゼルバイジャン語の疑問接語はむしろ日本語の「カ」と類似点があることを明らかにした。

日本語との対照という点では今後もさらに詳細な研究を必要とするが、トルコ語やアゼルバイジャン語における疑問の焦点の限定化という機能を担うものは、現代日本語には一見ないように見えるが、日本語では文末の「ノカ」形式が意味的にはそれに対応しているということも指摘した(〔口頭発表〕(3))、〔雑誌論文〕(1))。

(3) 前節でも言及したとおり、典型的な聞き手に対する質問という観点からは、疑問接語の生起の有無と、典型的な疑問文であるかどうかには直接的な関係は今のところ認められない(〔口頭発表〕(1))。ただし、疑問接語が生じる場合には相手の返答を要求しているニュアンスを帯びるように感じられること、また相手への勧誘(たとえば、「一緒にやってみようか」のような意味を表す文)を表す場合、疑問接語があることで聞き手に対する言い方を和らげる効果がある、という言語情報提供者からのコメントも得られた。このことから、アゼルバイジャン語の疑問接語は疑問それ自体を表すマーカーではなく、質問とは別の「聞き手への働きかけ」を表すマーカーであると考えられるかもしれない。そうであれば、音韻・形態、あるいは統語上類似しているトルコ語の疑問接語と対照した場合、上記の機能の違いがあるという点が明らかとなる。

(4) その他、アゼルバイジャン語において相手に聞き返す疑問文(エコ-疑問文)ではそもそも疑問接語が使われない傾向が見られた。このことと、典型的な諾否疑問文で疑問接語が生起しないこととの間に因果関係があるかどうかは今のところ不明であり、今後の研究を待たなければならない。ただし、「アゼルバイジャン語において疑問接語が省略される」という従来からの言及について、口語で疑問接語が観察されないという印象を持たせる原因の一つは、エコ-疑問文にもある可能性がある。このことは、トルコ語でエコ-疑問文に疑問接語がほぼ確実に生起されることと比較するとなお明らかである。

(5) 今後の課題として、可能であれば言語話者の年齢層や男女差などの分布を広くした上でのさらに大規模な調査が必要である。また、モダリティの類型をさらに細分化した上で、典型的でない疑問文と疑問接語との分布の関係について、さらに精密に分析する必要がある。また理論言語学への貢献として、トルコ語で提唱されている、「疑問を表す素性がエコ-疑問文を除き、疑問語疑問文では具現化しない」という説明がアゼルバイジャン語にも適用可能であるかを検証する必要がある。あわせて、文末に「イントネーション形態素」というものがあり、この形態素が疑問接語の具現化をコントロールする」というトルコ語学の分野で提唱されている説明がアゼルバイジャン語にどの程度適用可能であるかを検証する必要がある。最後に、疑問接語の生起の有無と関連して、アゼルバイジャン語における「音形をもたないコピュラ」がいつ存在するか(同時に、いつ存在しないか)という問題(cf.〔口頭発表〕(2))も本研究で明らかになった課題である。いずれも、今後の研究に委ねたい。

(参照文献)

研究代表者に関連する文献については、次節に一覧化する。

- Abdullayev, Əlövsət (et al.) (2007) Müasir Azərbaycan Dili: Sintaksis (『現代アゼルバイジャン語: 統語論』). Bakı: Şərq-Qərb.
- Aygen, G. (2007) Q-particle. Journal of Linguistics and Literature. 4-1.
- Hüseynzadə, Muxtar (2007) Müasir Azərbaycan Dili: Morfologiya (『現代アゼルバイジャン語: 形態論』). Bakı: Şərq-Qərb.
- 佐藤久美子 (2013) 『小林方言とトルコ語のプロソディー: 一型アクセント言語の共通点』. 九州大学出版会.

Yücel, Özge (2012). What moves where under Q-movement? In Kincses-Nagy, É. and Biacsi, M. (eds.). The Szeged Conference.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

(1) 吉村大樹 (2017) 「トルコ語母語話者に対する『ノカ』形式の指導にむけて」. Kahraman, Cahit and Toksöz Levent (eds.) *Japon Dili ve Kültürü İncelemeleri* (『日本語・日本文化諸考究』). London: Transnational Press London. 67-79. (査読: 有)

(2) 吉村大樹 (2016) 「日本語の『カ』とトルコ語の疑問接語 ml の文法的機能の対照」. Aydın, Özbek, Özşen, Tolga and Kawamoto, Kenji (eds.) *Japon Dili ve Kültürü Eğitimi Araştırmalarına Yeni Yaklaşımlar* (『日本語・日本文化教育研究への新アプローチ』). Çanakkale: Paradigma Akademi. 209-223. (査読: 有)

(3) 吉村大樹 (2015) 「いわゆる『マス形』における日本語とトルコ語との対照」. Tekmen, Ayşe Nur, Sugiyama, Tsuyoshi, and Avdan, Nagehan (eds.) *Japon Dili İncelemeleri* (『日本語諸考究』). Ankara: Türk Japon Vakfı. 41-51. (査読: 有)

〔口頭発表〕(計 7 件)

(1) 吉村大樹 (2018) 「アゼルバイジャン語諾否疑問文研究の課題」. ユーラシア言語研究コンソーシアム 2017 年度年次総会口頭発表論文 (於: 京都大学ユーラシア研究センター、2018 年 3 月 29 日)

(2) Taiki YOSHIMURA (2018) Morpho-syntactic behaviour of the Azerbaijani copular clitic. Paper read at the International Workshop "Current Topics in Turkic Linguistics. ILCAA: Tokyo. (4 March 2018)

(3) 吉村大樹 (2017) 「トルコ語母語話者に対する『ノカ』形式の指導にむけて」. (ナムック・ケマル大学(テキルダー)トルコ: 2017 年 7 月 3 日)

(4) Taiki YOSHIMURA (2017) On the Distribution of the Azerbaijani Interrogative Clitic. Paper read at the 18th International Conference on Turkish Linguistics. Çukurova University: Adana. (26 February 2017)

(5) 吉村大樹 (2016) 「日本語の『カ』とトルコ語の疑問接語 ml の文法的機能の対照」. 第 1 回トルコ日本語・日本語教育国際シンポジウム(JADEUS 2016)口頭発表論文. (チャナッカレ、トルコ: 2016 年 6 月 4 日)

(6) 吉村大樹 (2015) 「いわゆる『マス形』

における日本語とトルコ語との対照」. 第 14 回トルコ日本語教師会大会. (2015 年 6 月 13 日)

(7) Taiki YOSHIMURA (2015) Focussing and morpho-syntactic characteristics of Turkish predicates. International Workshop on Kakarimusubi from a Comperative Perspective. Tokyo: National Institute for Japanese Language and Linguistics. (6. September, 2015)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/azerbaijaniinterrogative/>

〔アウトリーチ〕吉村大樹 (2016) 「アゼルバイジャン語の疑問文への疑問」. フィールド言語学カフェ・特別編「アジア地域の言語と文化」. 於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 2016 年 11 月 19 日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉村大樹 (Taiki YOSHIMURA). 東京外国語大学, アジア・アフリカ言語文化研究所, 研究員

研究者番号: 80522771

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

(国外)

アイシェヌール・テキメン (Ayşe Nur TEKMEŒ) : アンカラ大学教授.

オズベッキ・アイドゥン (Özbek AYDIN) : チャナツカレ・オンセキズマルト大学准教授.

イブラヒモフ・ヤシャール (Yaşar İBRAHİMOV) : アゼルバイジャン言語大学講師、同大学日本研究センター長.

(国内)

日高晋介 (Shinsuke HIDAKA) : 東京外国語大学大学院.

奥真裕 (Masahiro OKU) : 東京外国語大学大学院.